黒者曰蕨、紫者曰蕨音期置熱湯中令熟然後可噉之、

〔箋注倭名類聚抄九菜〕按史記伯夷傳登彼西山兮采其薇矣、是亦謂毛詩爾雅之薇、而陳藏器又云、夷齊食蕨而夭、與史記三秦記異、蓋以毛詩四月篇云、山有蕨薇、蕨薇並稱謂薇是蕨類、故唐俗有蕨類名薇者、陳氏亦誤、以夷齊所食之薇爲蕨、源君亦同其誤、故連引薇蕨二字訓和良比、其實爾雅薇蕨二字不連牽也、

〔易林本節用集和草木〕薇ワラビ同　蕨

〔和爾雅七菜蔬〕蕨ワラビ一名　蕨拳ワラビノホ　鱉

〔海人藻芥〕内裏仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被召事也、一向不存知者當坐ニ迷惑スベキ者哉、○中略

ツク〳〵シハツク、蕨ハワラ、葱ハウツホ、如此異名ヲ被付、近比ハ將軍家ニモ、女房達皆異名ヲ申スト云々、

〔東雅十三穀蔬〕薇蕨ワラビ　倭名鈔に爾雅註を引て、薇蕨二字引合せ讀てワラビといひ、貫衆讀てヲニワラビといふと註せり、爾雅及び陳藏器李東壁等の本草に據るに、薇と蕨とは相類して同じからざる事、猶貫衆と薇蕨との如し、倭名鈔に載せし所によれば、古の時には薇蕨の類、總稱してワラビと云ひしと見えたり、今俗にワラビといふ物は卽蕨也、ゼンマイといふものは卽薇也、ワラビといふ義不詳、ゼンマイといふが如きも亦不詳、オニワラビと云ひしは、そのワラビにして大きなるを云ひし也、ゼンマイは、蕃語なるに似たり、

〔倭訓栞後編十八〕わらび　新撰字鏡に蕨をよめり、歌に藁火にもよせてよめり、藁火の字通鑑に見えたり、蕨も萌出る事の速なれば、藁火もて呼しにや、歌にさわらび、したわらび、かぎわらびなどよめり、根もて餅とし、又其からを繩とす、新撰字鏡に、狗脊を大わらびとも、山わらびとも訓せ